

## 4. ラグビーワールドカップ2019に対する メディカルサポート

田島卓也\*<sup>1,2</sup>, 中村明彦\*<sup>1</sup>, 外山幸正\*<sup>1</sup>  
東原潤一郎\*<sup>1</sup>, 佐藤晴彦\*<sup>1</sup>, 高澤祐治\*<sup>1</sup>  
山田陸雄\*<sup>1</sup>, 守屋拓朗\*<sup>1</sup>, 帖佐悦男\*<sup>2</sup>

### ●はじめに

2019年に第9回ラグビーワールドカップ(RWC)が日本で開催され、全世界より予選を勝ち抜いた20か国が来日し12都市で全45試合がおこなわれた。総観客数1,704,443名、チケット販売率99.3%、パブリックビューイング入場者数1,137,000名という記録を残し成功裡に閉幕した<sup>1)</sup>。メディカルサポート体制の構築は大会成功を左右する要因の1つである。メディカルサポート体制の構築について報告する。

### ●誰がメディカル体制を構築するのか

RWCは統括団体であるワールドラグビー(WR)や開催地の日本ラグビーフットボール協会(JRFU)ではなく、運営委託されたラグビーワールドカップリミテッド(RWCL)および日本国内のRWC2019組織委員会が運営する(図1)。2017年3月に大会組織委員会の中にメディカルアドバイザーグループ(MAG)が結成され大会のメディカルサポート体制を構築した<sup>2)</sup>。日本での前例がないため前回大会の準備を参考にしうえてRWCLと協議を重ねて策定した。

### ●メディカル事案策定のポイント

大会に関与するメディカル事案は多岐に渡るが、ポイントは地域医療・マッチデーメディカ

ル・観客対応・チームメディカルサポート、になる。これらは密接に絡んでおり横断的な策定が必要となる。観客医療に関する内容は同セッションの高澤祐治先生の項を参照ください。

### ●キャンプ地・試合開催地における医療

RWCにおいては選手・大会ゲスト・マッチオフィシャル(MOF)に対するメディカルサポートが義務付けられている。キャンプ地・試合地における医療サービスの構築やマネジメントをおこなうために地域におけるリーダー役(エリアメディカルオフィサー:AMO)が必要となる。なお、観光客やファンゾーン、パブリックビューイングに対するメディカルサポートは自治体担当事案となる。試合開催地または公認チームキャンプ地ごとに1名のAMOが必要となるが、基本的に各都道府県ラグビー協会のメディカル委員長を想定して人選した。今回は全国で61自治体より合計54件の公認キャンプおよび試合が実施されたので、54名のAMOを選出した。

AMOの業務として「メディカルサービスディレクター」というチーム滞在地域の医療ガイドブックを作成していただいた。事前に医療機関をリストアップし、担当の医療機関、画像診断、救急体制、担当医師、診療科、連絡先に加えカード払い可能かどうかなどの情報も加えて作成した。さらにAMOの業務としては、チームがキャンプ地・試合開催地に移動した際にチームに貸与するメディカルキットの引き渡しと回収がある。キットはMAGが策定し組織委員会が準備した。また、滞在期間中は常にチーム側より相談や依頼がある

\*1 ラグビーワールドカップ2019組織委員会メディカルアドバイザーグループ

\*2 宮崎大学医学部整形外科

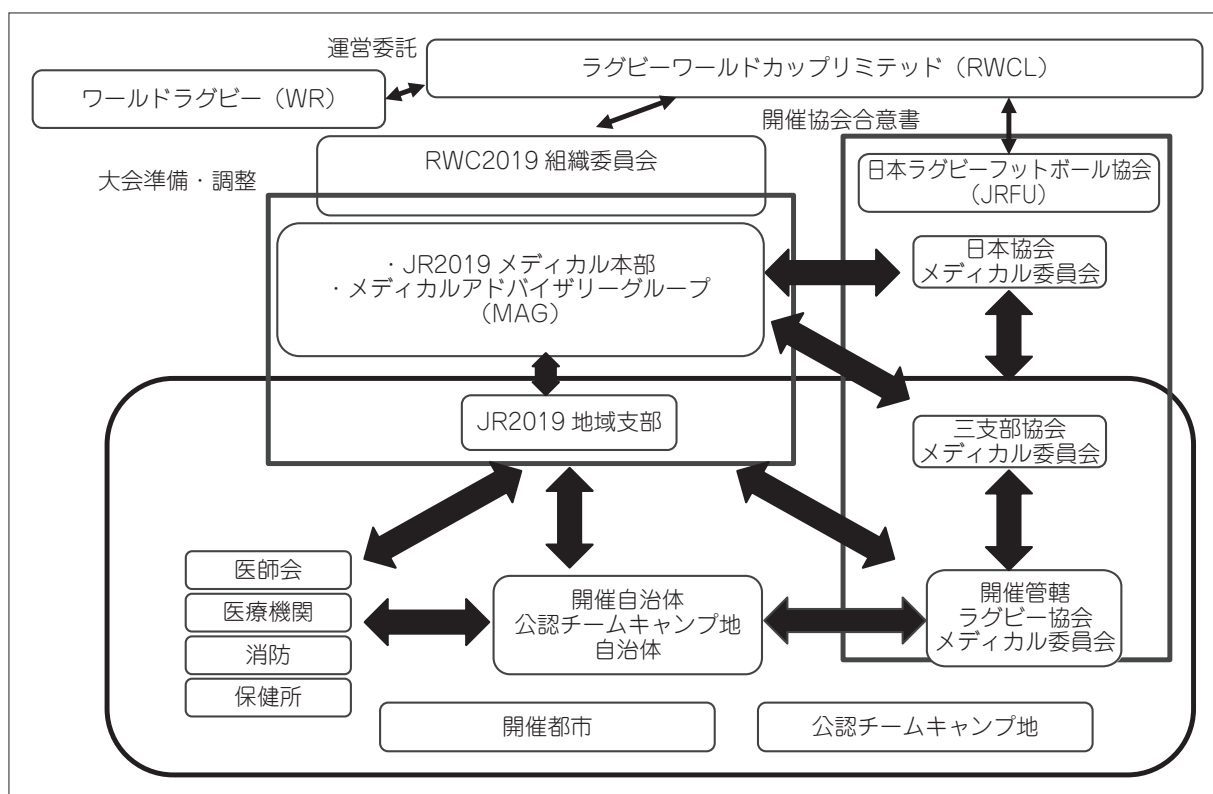


図1 RWC2019 実施体制模式図

ため、適宜対応していただいた。

### ●試合時におけるサポート

スタジアムのアクセスコントロールエリア (ACA) に対する選手、チーム、MOF、ゲスト、観客に対するサポートを組織委員会が担当することになる。ACA では競技エリアとされる選手、チーム、MOF そしてゲストに対する導線と観客は別になる。競技エリアの中でもフィールド・オブ・プレー (FOP) に入ることができるメディカルスタッフは MAG が選定する。選手・マッチオフィシャル用医務室、ゲスト対応医師、観客対応に従事するスタッフは現地の状況を鑑みて AMO が選定する。なお、選手・MOF 用の医務室に出務する医療スタッフの人数や専門は大会規定により定められている。FOP 内の担架搬送隊も AMO により選出される。また、スタジアムには 3 台の救急車を常駐させ、2 台は選手用、1 台は観客用に配備した (図 2)。

### ●医務室物品

選手・チーム・MOF に対する医務室内の医療物品は多岐に渡り、十分に事前協議を重ねて決定

した。今大会においては RWCL の強い希望もあり、各スタジアム内にポータブル X 線装置と技師を配備した。試合会場の医務室を診療所登録し、事前に放射線の線量検査を経て実現した。また、撮像した画像データを速やかにチームドクターに渡せるようにした。

### ●後方支援病院

試合時の後方支援病院の整備も AMO が担当した。スタジアムからの移動距離・時間を考慮し、頭頸部重症外傷に対応可能な施設で、各種画像検査が可能な病院を選定していただいた。なお、観客に対する後方支援病院は選手用とは別に定めた。

### ●マッチデーメディカル：FOP

FOP に入ることができるスタッフは WR の規定で厳しく制限されており、ラグビーの救急対応に即した国際資格を保有し、エリートレベルラグビーに対する十分な経験と技量を積んだ医師が選出される。FOP に入ることができるのは 1 試合につき Match day doctor, Assistant match day doctor, Immediate care lead, Immediate care doctor

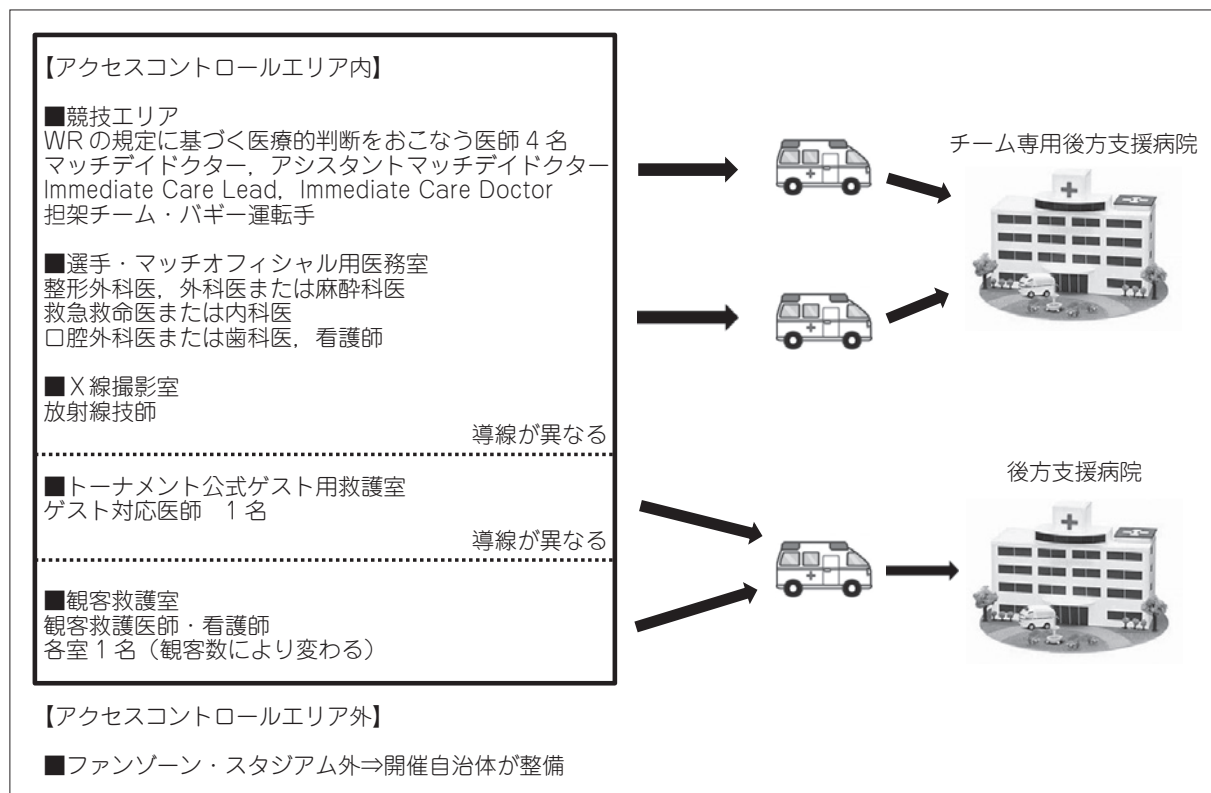


図2 試合時の医療体制の概要

の4名である。その他には担架搬送隊やバギー運転手は適宜入ることができる。

RWCを見据えて国際資格受講推奨や人材育成をおこない、2016年には資格保有者は81名になった<sup>3)</sup>。その後、ジャパンラグビートップリーグ、国際試合、スーパーラグビー、7人制国際大会など合計295試合でのマッチデイドクターの動きや判断を評価し実際のRWCに出務するスタッフを選出した。

### ●チームメディカル

海外では通常使用されている物品や薬剤でも日本国内には持ち込めないものもある。これらに関しては厚生労働省や各厚生局、および文部科学省やオリンピック・パラリンピック組織委員会と連携し、全チームに事前に持ち込み医薬品や機器のリストを提出してもらい内容をチェック・指導した。チームドクターとAMOが連携し適切な医療サポートを行えるように整備した。またチームの医療廃棄物は試合時にスタジアム内で回収することを定めた。

### ●最後に

盛況で閉幕したRWC2019であるが大会組織委員会やJRFUのみならず、キャンプ地・試合開催地をはじめ全国の医療関係者・行政関係者の皆様のご支援・ご協力があって初めて成立したと考えられる。実際に経験して始めて認識することも多く、今後の日本における国際メガスポーツのメディカルサポート体制構築に寄与するものであると思われる。

### 文 献

- 1) World Rugby. Available at: <https://www.rugbyworldcup.com/2019> [Accessed 22 July, 2021]
- 2) Tajima T, Takazawa Y, Yamada M, et al. Spectator medicine at an international mega sports event: Rugby World Cup 2019 in Japan. *Environ Health Prev Med.* 2020. Nov 24; 25(1): 72.
- 3) The Road to Rugby World Cup 2019 in Japan | BJSM blog - social media's leading SEM voice (bmj.com).